



星空紀行

～銀河鉄道の夜汽車に乗って～

2012年06月08日

青春期の賢治と星 (1)～(2)

(1)

中学時代からも星が好きであった賢治ではあったが、それが科学的な興味を伴いつつ、明確な形として芸術の発露という形をとるのは、もっと後である。もともと、中学時代には同郷である石川啄木の影響もあって、文学や歌に目覚めていた。彼の短歌で最初に星が詠み込まれたのは15歳の頃の短歌である。

鉄砲が つめたくなりて みなみぞら あまりにしげく 星流れたり

これは盛岡中学での三大行事であった、岩手山麓での秋の鉄砲演習の情景であるとされている。秋の夜、金属でできた鉄砲が冷たくなり、夜露に濡れる様子が目に浮かぶ。天文ファンだと、天体望遠鏡の金属部分があっというまに冷えていくのを知っているので、共感できるだろう。また、秋は流星が多い時期である。流星群の出現する時期でなくても、多くの流星が出現するのだ。光害ひとつない夜空に、賢治は多くの流星を目にしたことだろう。

1914年、盛岡中学校を卒業した賢治は、その後、いくつかの精神的な"転機"を迎える。そのひとつは失恋だ。肥厚性鼻炎を患って、岩手病院に入院したとき、看護婦に恋をするが、結局は実らなかった。もうひとつは、上級学校での進学後の人間関係である。盛岡高等農林学校（現在の岩手大学農学部）に進学した後、学生寮で同室となった保阪嘉内と仲良くなり、1917年には文学同人誌「アザリア」を創刊する。その結びつきは強く、研究者によれば、同性愛的な親しさを感じていたのではないかともいわれている。（たとえば、「宮沢賢治の青春―"ただ一人の友"保阪嘉内をめぐる」菅原 千恵子著）しかし、その想いは別の方向に向き始め、次第に保阪と決別していくのは、前回に紹

介した友人の死とともに大きな転機となったことは、疑う余地はない。精神的な転機ごとに星を見上げていた可能性は否定はできないだろう。

(2)

賢治が中学時代、そして高等農林学校時代を通じて、友人を失った悲しみや、実ることのなかった初恋などを経験し、これらが後に「銀河鉄道の夜」に現れる基礎となったことは多くの人が認めるところである。

ただ、それだけでは星の文学にはならない。もともと賢治には強い表現に対する意欲があったが、それを文学の面で刺激したのは同郷の石川啄木の存在であり、同好の友の存在、そして星の面で理科少年の賢治を刺激したのは、間違いなく満天の星空であっただろう。

この二つの側面で、賢治がよりいっそう刺激を受けることになるのは、20代前半、彼が上京した時である。妹が病気になり、その看病のために上京した折に、萩原朔太郎の詩集『月に吠える』に出会い、深く感銘を受けた。星に関しても同様であった。この時か、あるいは後に家族に無断で上京して、宗教団体である「国柱会」の門をたたいた時だったかは明確ではないが、星に関する最新の知識を得て、刺激を受けたのである。賢治の主治医でもあった佐藤隆房氏の文章には、東京から帰ってきた賢治が花城小学校の先生を訪ねてきた折り、ひとしきり星の話をした翌朝、星座早見盤をプレゼントしにやってきたことが記されている。賢治がこれを東京で手に入れたことは間違いない。

もとより理科少年として、ある程度の知識を得ていたことは間違いないが、情報の少ない時代、岩手の片田舎で得られる知識、それも日進月歩であった天文学に関する知識は限られていた。東京で最新知識に触れたことが、賢治の知的好奇心を刺激し、星の文学の土台になったことは確かである。





星空紀行

～銀河鉄道の夜汽車に乗って～

2012年07月24日

賢治が触れた星の情報源 (1)～(5)

(1)

賢治が上京したときに手にしたのは星座早見だけではなかった。宇宙や星に関する最新知識を紹介した本も大きな影響を与えた。ただ、大正時代に出版された一般向けの天文書は多くはない。賢治が帰郷して花城小学校の先生にプレゼントした星座早見もどれか特定できる。というのも、大正時代に発売されていた星座早見は、小倉伸吉の『誰にも必要な星の図』（1913年、現代之科学社）や『改訂 星の図』（1925年、大鏡閣）などがあるものの、ぐるぐるまわる盤の重ね合わせによる星座早見盤としては、日本天文学会編・三省堂発行のものしかなかったのである。

さすがに本の方は一冊だけということではなかったが、数えられる程度であることは確かだ。明治時代にも、科学や哲学全般の中で天文学の解説をされるような本は存在したが、単行本としては、東京天文台に勤めていた一戸直蔵による著作群（『月』（1909年）、『暦』（1909）、『星』（1910）、以上すべて裳華房）や翻訳がわずかにあるのみだった。

それでも大正時代に入ると、少し幅が広がっていった。たとえば京都大学に勤務し、日本ではじめて天文愛好家の組織を立ち上げた山本一清による著作群（『星座の親しみ』（1921年）、『星空の観測』『遊星とりどり』（1922年）、『火星の研究』（1924年）、『宇宙開拓史講話』（1925年）、以上すべて警醒社）、キリスト教の布教で有名な吉田源治郎の『肉眼で見える星の研究』（1922年、警醒社）、東京天文台の関口鯉吉による著作群（『太陽』（1925年）、『天体』（1926年）、以上すべて岩波書店）、同じく東京天文台の神田茂による『彗星』（1924年、古今書院）、そして真に天文学書といえるかどうかわからない内容だが、古川龍城の著作群（『天体の美観 星夜の巡礼』（1923年 表現社）、『星のローマンス』（1924年 新光社）、『天文学と人

生』（1924年 想泉閣））、そして、昭和になってから名作を著すことになる野尻抱影の初期の著作群（『三つ星の頃』（1924年）『星座巡禮』（1925年）、以上すべて研究社）で、ほとんど尽きている。

これらの著作のうち、賢治が手に取ったものはどれなのか。実は、その答えは賢治の作品に現れる星の表現に隠されていた。

(2)

筆者が宮沢賢治の作品に初めて触れたとき、すでに天文ファンであった私が違和感を感じたのは、さそり座についての表現であった。

さそり座は皆さんご存じのように、夏の代表星座の一つで、南の地平線上に大きなS字カーブを描く見事な星の配列である。そして、その中心には一等星アンタレスが赤く輝いている。このアンタレスは、ちょうどさそりの心臓にあたる場所にある。しかし、賢治の作品では、このアンタレスがしばしば「さそりの眼」として表現されているのである。たとえば、「双子の星」という童話の中では、

『その時向うから暴(あら)い声の歌が又(また)聞えて参りました。大鳥は見る見る顔色を変えて身体(からだ)を烈(はげ)しくふるわせました。

「みなみのそらの、赤眼のさそり
毒ある鉤(かぎ)と 大きなはさみを
知らない者は 阿呆鳥(あほうどり)。」

そこで大鳥が怒って云いました。』

と描かれている。さらに詩集「春と修羅」の中の「三六六 鉦染とネクタイ」という詩にも

『蠍の赤眼が南中し
くわがたむしがうなって行って
房や星雲の附属した（以下略）』

という表現が現れる。有名な「星めぐりの歌」にも同様の表現がある。これらは賢治独特のアンタレス観であり、どうにも不思議であった。

実は、前回挙げた書物の中に、一冊だけ同じ表現を使っている本がある。それは吉田源治郎著の『肉眼で見える星の研究』（1922年、警醒社）である。さそり座の表現の中で

『眼玉として赤爛々たるアンタレスが輝くなど実に偶然とは思へない程巧みな星の配置であります』

と書かれているのだ。この事実は、すでに賢治研究の先人である草下英明氏によって指摘されている。発行年代から考えてみると、上京した賢治がこの書物を手にした可能性は大きい。

(3)

さそり座の一等星アンタレスを、さそりの目として表現・紹介した吉田源治郎著『肉眼で見える星の研究』（1922年、警醒社）。そして、賢治の作品にでてくるアンタレスの表現。それらを鑑みると、これこそが上京した賢治が手にした星の本のひとつである可能性は大きい。

では、さそり座のアンタレスを赤い目と見立てた賢治の表現が、この書からの借り物であったかという、単純にそう言い切れるわけではない。たとえば、ひとつは執筆年代の問題である。前回に紹介した「みなみのそらの、赤眼のさそり」という表現がでてくる童話「双子の星」の執筆年代である。この童話は比較的初期の作品とされていて、最初に創作したのが1918年とされている。これは明らかに『肉眼で見える星の研究』の出版年である1922年よりも4年も前になるのだ。

さらに、冒頭に「あかいめだまの さそり」が登場する「星めぐりの歌」も同様の事情がある。もともと、この歌は上記の「双子の星」から採られた表現を歌詞として、曲にしたものだ。これも吉田の本の出版前ということになる。

ただ、このアンタレスを赤い目と表現した以外にも、いくつかの点で、賢治研究の第一人者である草下英明氏は、吉田の本の賢治作品への強い影響を指摘している（『宮澤賢治と星』、學藝書林）。総合的に見れば、賢治がこの本を手にして、星の知識を得ていたことは確実だろう。しかし、草下氏は、この執筆年代の矛盾には気づかなかったようだ。

もちろん、賢治は「銀河鉄道の夜」でも何バージョンもあるように、作品を作り上げてから何度も書き直すことが多かった。したがって1918年の作品についても、吉田の本を読んでから書き直す可能性も決してゼロではない。しかし、最新の天文学の知識を得て、何か新しい要素として書き入れるならまだしも、文学的表現を参照文献をもとに書き直すのは考えにくい。

では、アンタレスを赤い目にたとえた表現は、いったいどこから生まれたのであろうか。

(4)

星に視線を感じていた賢治

吉田源治郎著『肉眼に見える星の研究』（1922年、警醒社）は、いくつかの点で明らかに賢治のその後の作品に影響を与えたことは間違いがない。この点は、特にほかの例、たとえば「アルビレオの観測所」として『銀河鉄道の夜』に登場するアルビレオという二重星を「トパーズ」と「サファイア」と表現していることなどからも明らかである。

しかし、さそり座の一等星アンタレスを、さそりの目と表現した点については、その限りではなさそうである。賢治の創作した童話『双子の星』は本書発刊前であり、その影響を受けたというのは間違いだろう。むしろ賢治は、本書を読んで、自分が感じたとおりで思ったかもしれない。

もっと大事なことは、賢治が星を眼にたとえている例が、さそり座のアンタレスだけではないことである。初期の創作である短歌の中には「西ぞらの黄の一つ目」として宵の明星である金星が、さらに「うしろよりわれをにらむ青きもの」として全天で最も明るいおおいぬ座の一等星シリウスが表現されている。これらは夜空の中では特に明るい星ばかりである。

私事になるが、中学一年生の頃、天文学に興味を持って、夜な夜な天体望遠鏡で観測のまねごとをしていた夏休みの深夜。望遠鏡を片付けて、もう寝ようと部屋の南向きの窓を開けると、どっしりとした光を放つ木星の光が見えた。窓から見える木星の光に、筆者もなんだか自分が見つめられているような気がして、なんだか眠れなくなった覚えがある。観測のまねごとをしているときには、記録をとるのに夢中で、決して生じない感覚だった。自分の存在というものを哲学的に考え始める思春期の心理に、星の光が微妙な影響を与えたのだろうか。

アンタレスを赤い目にたとえた表現は、やはり賢治のオリジナルといってよいだろう。賢治は輝星に自分を見つめる視線を感じていたのである。『肉眼に見える星の研究』と賢治の作品について、3年

にわたって詳細に研究した元奥羽大学の沢正善氏によれば、賢治が星を眼と表現する理由について「一個の星を「眼」と見る傾向が注目されるが、それはまた、当時の賢治の内閉的な孤独感を暗示するのかもしれない」としている。

(5)

『肉眼に見える星の研究』と『銀河鉄道の夜』

明るい星に、自分を見つめる「視線」を感じていた賢治は、吉田源治郎著『肉眼に見える星の研究』（1922年、警醒社）に出会い、強く影響されていった。さそり座の一等星アンタレスを、さそりの目と表現した点は賢治のオリジナルだったが、同じような表現が本書に使われていることに我が意を得たりと思ったに違いない。ここでは、少し賢治の代表作『銀河鉄道の夜』に現れる本書の影響を見ておきたい。

草下英明氏の指摘で明らかになった代表例は、「アルビレオの観測所」として登場する二重星アルビレオ（※1）の表現である。『肉眼に見える星の研究』では、

「連星中の大きな方の星は、三等星で、色はトパーズのような黄色に輝き、小さい方は、サファイアのような碧色をしてゐます」

とある。

『銀河鉄道の夜』では、おそらく、同じ岩手県内に設立されたわれわれ国立天文台の水沢観測所（※2）を賢治は意識していたと思われるが、この「アルビレオの観測所」をくるくるまわる連星と見立て、「トパーズ」と「サファイア」と表現している。当時の出版物では、本書以外にアルビレオの紹介そのものが見当たらないとされている。

また、『銀河鉄道の夜』初期の原稿では、終わりの部分にカンパネルラが消えた後、悲しむジョバンニに対して「おまへはあのプレシオスの鎖をとかななくてはならない」と励まされる部分があるが、これも『肉眼に見える星の研究』で、

「汝プレイアデス（昴宿）の鎖索を結び得るや」

「汝オリオン（参宿）の繫繩を解き得るや」

という旧約聖書の表現が紹介されており、賢治が着想を得たことは明らかである。

そしてなにより本書を執筆した吉田源治郎が、敬虔なキリスト教徒であったことは大きい。そのため、神話の本格的な解説に加えて、北十字と南十字の解説にも字数をさいている。

「天に十字架が二つあります。一つは北天の白鳥座（中略）、今一つは（中略）南天の極近くに輝く、美しく輝く「南の十字架」座であります」

『銀河鉄道の夜』が北十字から南十字への旅であること、賛美歌が歌われることなど、賢治の代表作への本書の影響の大きさは計り知れないのである。



※1 アルビレオ

はくちょう座のくちばしに位置し、望遠鏡で観察すると金色の主星と青色の伴星の並びが判る。美しい色から「北天の宝石」とも言われている。また、近年の観測では主星そのものも連星であるため、厳密にはアルビレオは三重星ということになる。地球からは約430光年の距離にある。

※2 「国立天文台水沢」

現在の岩手県奥州市にある。1899年に水沢臨時緯度観測所として発足、初代所長・木村榮（ひさし）による地球の揺らぎ「Z項」の発見などで有名である。現在では国立天文台の主要施設の一つとして、VLBI観測施設や電波天文台が置かれる他、奥州宇宙遊学館では一般の方々が楽しく宇宙科学に接することができる。